

# ストーリー中心型カリキュラム採用の看護師指導者向け インジェクショントレーナー養成コースの初期検証

The initial inspection of an injection trainer training course for nurse leaders of the story-centered curriculum adoption

北村 隆始\*\*、田中 光子\*、星野 早苗\*、根本 淳子\*\*、渡邊 あや\*\*、鈴木 克明\*\*

Takashi KITAMURA\*\*\*、Mitsuko TANAKA\*、Sanae HOSHINO\*、

Junko NEMOTO\*\*、Aya WATANABE\*\*、Katsuaki SUZUKI\*\*

\*テルモ株式会社 \*\*熊本大学大学院教授システム学専攻

\*Terumo Corporation \*\*Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

〈あらまし〉 実務家育成教材の開発において、実践的な教育効果を目指すためには、実践が容易に想像できる理論に基づいた教育カリキュラムが求められる。いくつかの教育方略を通して単回の教材として提案・実践されているが、多岐にわたる学習成果を連携してカリキュラム化した例は少ない。本研究では、ストーリー中心型カリキュラム（以下 SCC）を利用し、看護師指導者向けの実務教育に特化したカリキュラムを開始した。初回の SCC 参加状況や導入のねらいを元に初期検証を行った。

〈キーワード〉 ストーリー中心型カリキュラム、ゴールベースシナリオ理論、看護教育

## 1. はじめに

2008 年度より看護指導者対象「インジェクショントレーナー養成コース」を開始した。従来から新人向け注射技術コースは存在していたが、看護師指導者向けの静脈穿刺に特化したコースは少ない。米国では、IV ナース等注射技術に特化したコースも存在するが、本コースは注射技術を基礎に、指導能力や教育に関わる知識・技能・態度を習得する内容の特徴としている。

これまでトライアル・本コースの2度実施し、内容に関し好評を得ている（本コースアンケートで大変満足 41%、満足 59%）。しかし、コース内のセッション毎の関連に関する質問があったことやさらにコース修了後の実践行動への取り組みを高めるために、ゴールベースシナリオ理論に基づく実践的なカバーストーリーを用意し、指導者として学習者が修了後に実践できることを目指した。なお、新たなコースでは、これまで実施してきたコースの各セッションを変更することなく改善できる SCC を導入した。

本研究では、2009 年度コース開催直後第1回目の受講者からの報告書を元に SCC 参加状況や導入がねらい通りに進行しているかの初期（2009 年度第1回目実施後から第2回目開催直前）の検証を行い、今後の方向性を考察した。

## 2. 方法

延べ7日間（期間4ヶ月）のコースを全国から

17名（経験 Ave.16.9年 Max. 27年 Min.2年 SD7.0）が受講している。

コース自体は、従来コースの各セッションに静脈穿刺の基礎（実技）を追加したのみで、内容面の変更はない（一部講師の入れ替わりあり）。

SCC に関しては、新たに SNS 型の「クリニカルジョイント™」（以下 SNS）にコミュニティーを開設し搭載した。事前に小集団評価（5名）を行い、改善を図った上で、本研究の実地テストに入っている。

実施に際しては、事前に SCC 実施の協力案内を配布した上で、初回当日、カバーストーリー及び初回ストーリーについて、紙資料を用いて説明を行なった。SNS 参加登録には、メールアドレスが必要であるため、集まった9名（53%）に招待メールを送信した。また、メールがない受講者には、集合研修時に課題を配布し、報告書を Fax にて送付するよう依頼した。

## 3. 結果

### 3.1 SCC 参加状況

第1回目終了直後に SNS 招待メールを送付したところ、メール利用できない Fax 参加者を含め10名（全体の59%）の登録があった。SCC を実施しなかった過去2回と比較すると、早期に対象者が増えており、メールを取得しているがまだ手続きが終わっていない受講者を含めると12名（70%）近い参加者が見込まれる。

また、コミュニティへの書込み者数(報告書・Fax参加者を含める)も、前回までより顕著に増加していることが分かる(図1)。

尚、SNS招待メール送付者で未参加の方に関しては早急に原因確認する。

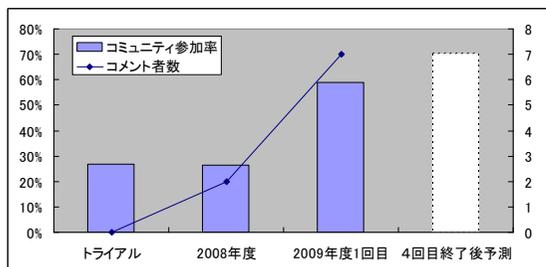


図1 SNS利用状況

### 3.2 SCC 適応状況

2009年度コースはGBS 7つの構成要素を設定しているが、SNS内のトピック毎に割振ることでGBSに基づいた公開をしている。事前に、根本・鈴木(2005)によるGBS理論の適応度チェックリストを利用し、適応度を確認した。今回、第1回目の進行で適応度に差異がないかを確認するとともに、予想以上のSNS未参加者がいたことを踏まえ、GBS理論の適応度に参加形態(SNS・Fax・未参加者)による差がないかということについても検証を行った(表1)。

表1 GBS理論の適応度チェック

GBS構成要素	SNSの設定	事前調査 適応度	SNS参加者 適応度	Fax参加者 適応度	未参加 適応度
使命	幸田師長の部屋；各回書込み	100%	100%	100% ※直前	100% ※直前
カバーストーリー	幸田師長の部屋；初回書込み	80%	80%	80%	80%
役割	幸田師長の部屋；添付画像	100%	100%	100%	100%
学習目標		100%	100%	100%	100%
シナリオ操作	報告書作成	50%	50%	50%	0%
フィードバック	幸田師長への報告書提出部屋	100%	100% ※ピアフィードバック未達	100% ※ピアフィードバック未	0%
情報源	ユニカの部屋(幸田師長の部屋、てるもの部屋含む)	100%	100%	75% ※情報発信が出来ない	75% ※情報発信が出来ない
対象者割合			41%	18%	41%
			59%		41%

結果、Fax参加者は、情報源の適応度の中で、トピックスへの情報発信ができない点で適応度が低下しているが、他はSNS参加者と同等の適応度が確認できた。一方、未参加者は、自己学習を行っていないため、シナリオ操作やフィードバ

ックを受けることができないため効果は半減している。従って、Fax参加でもかまわないので次回からの参加を強く要請する必要がある。

### 3.3 報告書の内容

2009年度コースはGBS 7つの構成要素の使命部分を報告書として提出を求めている。通常SCCでは報告書のフィードバックは、行動結果やコーチから行われるが、本SCCでは、さらにSNSの利点を活かし、報告書を公開方式で提出するよう全員に求めている。初回報告書の提出者は7名(41%)と少ないが、内容面の分析を、事例コード・マトリックスを用いて行った。縦方向のコードを報告書に義務付けた項目、横方向を提出者とした。縦方向からは、一人では気付かない内容を複数人が書き込むことで気付きを深める協調学習の効果が出ているようである。

### 4. 考察

事前に、「最初に提出した人の提出ボリュームが影響するのでは」という協調学習であるが故の懸念や、報告書の提出率に疑問を呈する意見などが示されていたが、現状問題は生じていない。受講者同士の交流やSNSに不慣れな点などの課題もあることから、当初の目的にある協調学習・ピアフィードバックを含め受講者間のやり取りを高めて行く方策を検討することが重要となる。

また、未参加者に対しては、早期にSCCに本格参加する為に、SNSもしくはFaxの参加を促す必要がある。Fax参加であれば次回の使命を集合研修終了時に手渡すことができればSNS参加者とほぼ同等のレベルのSCC体験は可能であろう。今回の方向性を加味しながら、今後、第4回目まで継続的に状況を把握して行きたい。

### 参考文献

- 熊本大学大学院教授システム学専攻(2007)IT時代の教育イノベーター育成.文部科学省平成19年度大学院教育改革支援プログラム年次報告書,熊本,pp,23-73
- 佐藤郁哉(2008)質的データ分析法.新曜社,東京,pp,59-73
- 鈴木克明(2002)教材設計マニュアル独学を支援するために.北大路書房,京都,pp,95-128
- 根本淳子,鈴木克明(2005).ゴールベースシナリオ(GBS)理論の適応度チェックリストの開発.日本教育工学会論文誌,29(3), pp.309-318